

—— 30年越しの編集後記 ——

ひとりで山を歩いていた頃から30年、この冊子の原稿を机の片隅で見つけてホームページの賑いにしようなどと画策した時からすでに10年という月日が流れ、いくつかの記録も散逸してしまいました。それを何で今さらということとはとりあえず置いておいて、山を歩いていた当時の日頃の生活などについてまず一言。

ひとりで山を歩いていたのは、24歳から30歳までの約7年間です。この冊子にあるのは、29歳から30歳にかけての記録で、その最後の1年間に当たります。当時私は、某メーカーで液晶の製造ラインを設計する仕事をしていました。山歩きのためのトレーニングと称して火、木、土と週3日スイミングクラブに通って約1時間で2000～2500mを泳ぎ、その他の日は残業をし、山に行かない土曜日は休日出勤というのが通常でした。機械設計の仕事は、自分の裁量でやれたということもありますが、仕事がそれなりにできていれば、とやかく言う人もいない時代でした。むしろ「仕事しかできない奴など所詮使えない」などと言われてしまうことさえあり、当然私も同じように思っていたのでした。当時は液晶といっても時計や電卓向けのもので、まだ十分に製造工程も確立しておらず、製造プロセスからかかわって、それを装置化していく仕事は大変面白かったのです。しかし明けても暮れてもドラフターに張り付いているだけでは、いいアイデアなど浮かぶわけもなく、煮詰まってしまうだけです。そんな時、プールで泳いで体を動かしたり、山に登って自然の中に身を置いたりすることが、私にとっては大変良いリフレッシュだったと言えます。ですから仕事上の多くのアイデアは、山を歩きながら考えたと言っても過言ではありません。当時の私にとって、機械設計の仕事と山歩きはどちらも欠くことのできない人生の両輪だったのだと思います。

そんな山歩きを続けていく中で、30歳を前にその記録を纏めてみようと思ったことも、今になるとただの偶然ではなかったような気がしています。それはこの冊子の最後にある針ノ木岳が、言わば「ひとりの山」の最後の山行になってしまったからです。膝を痛めてしばらく山に行けなかった間に、現在の奥さんと知り合い、その年の暮れに誘われていた鹿島槍への冬期合宿のかわりに新婚旅行に行きました。その後幼い娘たちを連れての山行などもしましたが、「ひとりの山」からはそのまま遠ざかってしまいました。つまりここにある山行の記録が、私がひとりで山歩きをしていた頃の最後の記録でもあるのです。さて最後にそんな懐かしさばかりでこの記録を再度ホームページの賑いにしようなどと思ったわけでもないことを一言。

ひとりの山歩きを終えて30年、その間奥さんとふたりで人生の山や谷を越え、今年の夏に還暦を迎えます。これを機に、長年考えてきた、山々の望める場所で自然の中に身を置いて暮らしたいという思いを実行してみることにしました。それに際し、そんなことを考えるきっかけともなった若い頃のひとりの山歩きを思い返すと共に、当初から編集後記は全てを纏めてから書こうと考えていたので、ここでけじめをつけ、新しい生き方を模索する指標となればと考えた次第です。 2014. 02. 14 雪の日